



SDGs ～伊江島から世界へ そして、未来へ～

伊江村立西小学校 〒905-0503 沖縄県国頭郡伊江村川平600 ☎0980-49-2012

ねらい
(育みたい
児童・生徒像)

SDGsの視点で、伊江島の歴史を調べたり世界の課題について考えたりすることを通して、持続可能な社会を実現するための目標や現代社会が抱える課題を理解し、地域(伊江島)に根ざした視点から、問題を解決するためにできることを考える。また自らの生活や行動に活かすことができるようにする。

授業・実践内容 【実践者】花城大教諭

▶1次目「SDGsについて知ろう」

「SDGs」と「2030年までに達成すべき17目標」を知る。「ゴール16・平和と公正をすべての人に」を重視し、島内の戦跡を見学し、戦争経験者から体験を聞く。

▶2次目「SDGsの視点で伊江島のためにできることを考えよう」

2030年までに伊江島がどうなってほしいかをイメージし、そのために自分ができそうなことを考える。学びをもとに劇を創作し、学習発表会で披露する。

▶3次目「伊江島から世界へ」

活動を振り返り、児童が整理・分析したことをホームページにアップする。

教科	総合的な学習の時間
対象	6学年(22人)
時間	40時間



子どもの反応・変化
児童の発言から、SDGsへの関心の高まりを感じるが増えた。2学期に授業で「自分たちにできることはないだろうか?」と考えると、海をもっときれいにしたいという声があがり、学校の近くでビーチクリーンをした。学習発表会では従来のテーマ「島の戦争の歴史」に、世界の児童の貧困や紛争問題を追加し、保護者がSDGsを知る機会になった。

教員の反応・変化
「SDGs」という聞きなれない言葉に最初はとまどうばかりだった。子どもたちと一緒に学ぶ中で、これまでやってきたこともSDGsにつながっていると実感できた。「SDGs」という言葉に目が留まるが増え、日常生活でも意識した行動が増えたように感じる。何より、社会課題がめぐりめぐって自分とつながっていることを学ぶことができた。

課題
SDGsを通した学びの成果を「広げる・発信する」という点で大きな課題を感じた。学んだことが、学年間にとどまりがちだったため、学校全体、地域へと広げていくことが必要。また担任の自主的な教材研究を中心に進めてきたが、専門的な講師を招くと子どもたちの学びの質がより高くなると感じた。学校の枠にとどまらない実践ができるとよい。

教材・参考資料

- ▶ 小学校学習指導要領解説「総合的な学習の時間」(文部科学省)
- ▶ 「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料 総合的な学習の時間(小学校)」令和2年3月、国立教育政策研究所教育課程研究センター
- ▶ 「『問い』が生まれる授業サポートガイド」(沖縄県教育委員会)





身近な環境問題について考えよう ～守りたい僕たちの宮城海岸～ゴミアートを作ろう

北谷町立浜川小学校

〒904-0113 沖縄県中頭郡北谷町宮城1-172
☎098-936-4952

ねらい
(育みたい児童・生徒像)

自分が住む地域と関わりながら、環境問題を通して地域を見つめ直し、主体的に考え発信することができる児童、活動に取り組める児童を育成する。



授業・実践内容 【実践者】安里千恵美教諭、屋良皇稀教諭、崎山涼教諭、兼城苗教諭

子どもたちは身近な環境問題について調べ、内容を発表し合う学習を進めてきた。学校に近い「宮城海岸や馬場公園のビーチのごみを減らしたい」という学年全体の共通課題を設定し、海岸やビーチで学年全体で清掃活動をした。子どもたちはごみの多さに驚きながら、積極的に拾い、浜をきれいにしようとしていた。校外学習後、拾ったごみでゴミアートを作って掲示し、「ごみを捨てない浜川っ子になろう」と校内放送やチラシで呼びかけた。

教科	総合
対象	5学年 (115人)
時間	8時間



子どもの反応・変化 ごみ拾い後の振り返りで「どうすればこのごみを減らせるか」と考えた。そこでゴミアートや、タブレットを使った校内放送、チラシでごみ問題を知らせるアイデアが出て、実践することになった。海ごみ以外にも「地球温暖化」「フードロス」「動物のすみやすい環境づくり」などの課題も学習発表会で発表できた。

教員の反応・変化 地域の環境問題を考える前に、資料や映像でSDGsを学んだ。子どもたちはSDGsや世界の環境問題について積極的に調べ、「地域の環境問題に自分たちにできることはないか」と真剣に向き合った。教員は「新しい取り組み」とは考えておらず、これまでの学習とSDGsを関連させることで子どもたちの主体性・発信力を育むことにつながったと考えている。

課題 子どもたちが一生懸命調べて話し合い活動を繰り返した「地球温暖化」「フードロス」などの環境問題は、まだ実践できていない。時間があればぜひ実践させたい。

教材・参考資料

- ▶「SDGsスタートブック」(東京書籍、2021年)
- ▶NHK for School「ど～する? 地球のあした」



私たちが住む博愛の島・宮古島 ～環境問題について

宮古島市立北小学校

〒906-0012 沖縄県宮古島市平良西里217
☎0980-72-3025



宮古島の良いところや現状を知り、住みよい宮古島を残していくために、自分たちにできることをSDGsの視点で考える。



📖 授業・実践内容 【実践者】佐久本拓実教諭

子どもたちがこれまでに各教科等で身に付けた資質・能力と本校の特色を踏まえ、探究課題を「住みよい宮古島を目指そう!」と設定した。この解決に向けて①指導計画の見直しと実践 ②学習形態の工夫 ③ワークシートの工夫・ICT機器の活用 の3点を挙げて学習活動に取り組んだ。

学習活動では、NPO法人による海の環境問題についてのワークショップやクリーンアップ活動を実施した。地域人材を活用し、体験活動を取り入れて、子どもたちが実際に目で見て・肌で感じる活動を設定し、SDGsの達成に向けた活動の充実を図った。

教科	総合的な学習の時間
対象	5学年(25人)
時間	35時間



環境問題に対する意識が向上し「物を大切に使う」「ごみを出さない・捨てない」など普段の生活でも少しずつ具体的な行動が見られるようになった。SDGsへの関心も高まり、SDGsパンフレットを自主的に作成する児童も出ている。

🌈 教員の反応・変化 「教材」「人」「能力・態度」のつながりを意識した学習活動を心掛けるようになった。これまで取り組んでいた学習活動にSDGsの3つの視点を加えることで、より充実した学習活動につなげていくという共通理解を、職員間で図っている。

🌈 課題 子どもたちが学習を通して考えた、環境問題に対する解決方法をどれだけ実践に移せるかが課題。またSDGsカレンダー・マトリックスとの関連性を持たせて指導計画・単元計画を見直し、改善を行っていきたい。

🌈 教材・参考資料

- ▶ 北小学校全体で作成したSDGsカレンダーとSDGsマトリックス
- ▶ NPO法人による、海の環境問題についてのワークショッププログラム





「白保村じまん」をすいせんしよう

石垣市立白保小学校

〒907-0242 沖縄県石垣市白保73-1 ☎0980-86-7840

ねらい
(育みたい
児童・生徒像)

この単元は『「町じまん」をすいせんしよう』と、町の自慢を効果的に伝えるポスター作りを行う「ポスターを作ろう」の2つの教材で構成されている。この単元を通して、どうすれば白保村のよさを効果的に伝えられるかを考え、情報を集め、集めた情報を適切に処理してポスターを作成する力をつける。

授業・実践内容 【実践者】美崎里美教諭

授業は、主に次の①から④で構成した。()内は各項目で重視した点。

- ① 児童一人ひとりが「白保村」から推薦するものを決める (主体性)
- ② 聞き手が納得するような構成を考える (既習事項の活用や構成の工夫)
- ③ クラス全員での発表会 (価値観や物事の多様性への理解)
- ④ 学習を通しての感想の交流 (学びの変容)

教科	国語
対象	5学年 (13人)
時間	9時間

実践の際には、主にSDGsの目標「ゴール4・質の高い教育をみんなに」、「ゴール11・住み続けられるまちづくりを」、「ゴール14・海の豊かさを守ろう」と上記各項目を関連させて進めた。



児童は育ってきた地域の「じまん」をよく知っており、豊年祭やアオサング等について伝えようと調べ学習を主体的に行った。調べる中で、今まで知らずに過ごしてきた地域の課題に気づく児童もいた。気づいた課題や危機も考えながら、文章やポスターで白保村の自慢を推薦することができた。

教員の反応・変化 以前からSDGsに関連する授業に取り組んでいたが、本単元を通してSDGsについて考える機会をさらに増やすことができた。本単元の授業例を校内で共有することで、各先生方がSDGsに関連した授業づくりの視点を持ち、その後のSDGs視点の授業実践や行事運営に活かすことができた。

課題 教科の課題として、相手を意識した書き方や、相手に伝わる表現方法等、分かりやすく伝える難しさに戸惑う児童がいた。SDGsに取り組む課題として、教師自身が単元とSDGsの関連を明確にして構成を考える必要性を感じた。どの教科にも言えることだが、SDGsを目的ではなく、手段として関連させていく意識も大切だと感じた。

教材・参考資料

- ▶ 「未来を変えるメッセージ みんなのSDGs」
(リベラル社、水谷孝次&MERRY PROJECT作、てづかあけみ絵)
- ▶ 「キーワードで教えるSDGs」
(騒人社、向山洋一監修、経済広報センター企画)